連　載

下久保ダムものがたり　その2

環境省環境カウンセラー　若林　高子

神流川（かんながわ）の歴史

昭和 43 年 11 月に完成した下久保ダムの貯水池は「神流湖（かんなこ）」と命名され、湖底のほぼ中央が群馬・埼玉の県境をなしています。左岸は群馬県藤岡市（旧多野郡鬼石（おにし）町）、右岸は埼玉県児玉郡神川（かみかわ）町（旧神泉（かみいずみ）村）で、集水面積 323k㎡、総貯水量 13,000 万㎥、四季を通して自然公園として親しまれ、湖面でのボート遊びやワカサギなどの魚釣り、冬桜の名勝地として、多くの観光客が訪れています。

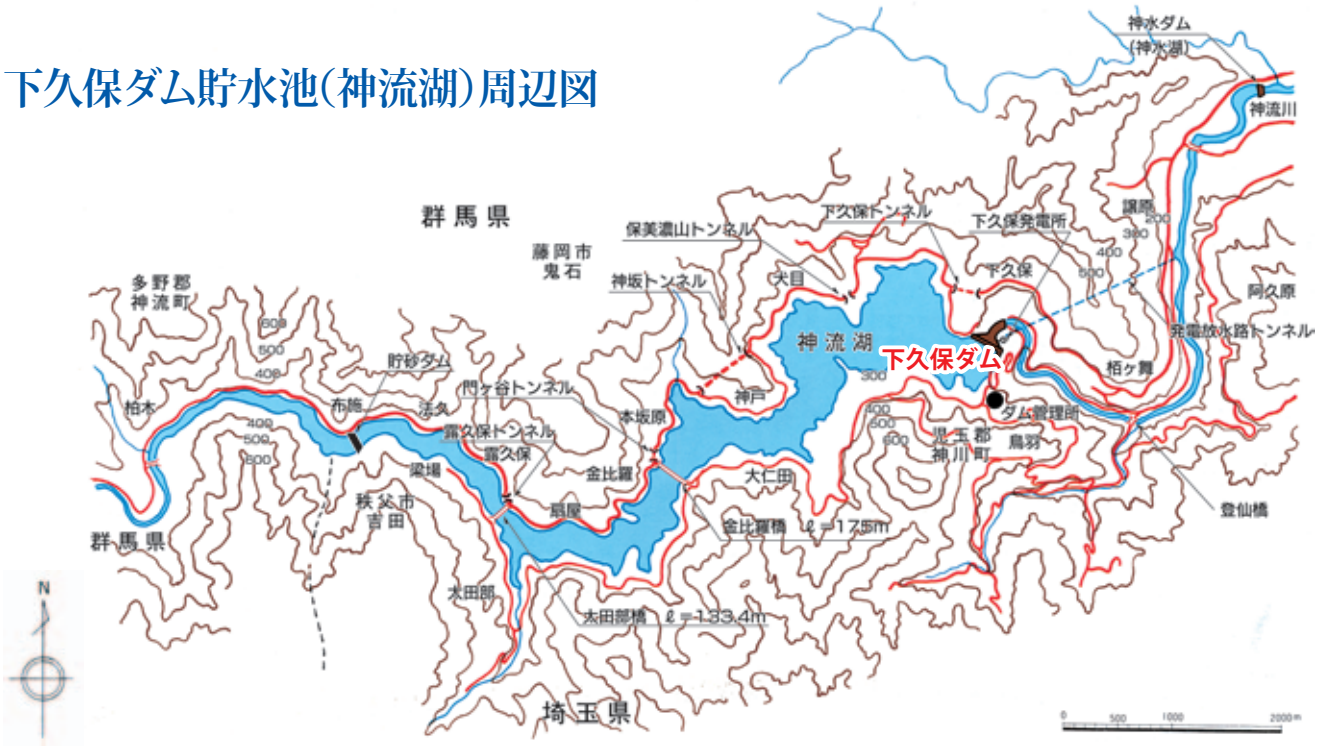
この地には数多くの縄文時代の遺跡が発見されており、古くから先進的な社会が形成されていました。鎌倉時代から戦国時代にかけては武士達が合戦を繰り広げた所であり、なかでも「神流川の合戦（1582 年）」は有名です。織田信長の家臣・滝川一益（いちます）と小田原北条氏の総勢 7 万人に及ぶ壮絶な戦いは、今に至るまで語り継がれ、“新町（しんまち）ふるさと祭り”では、勇壮な歴史絵巻が再現されています。

また神流川沿いの十石（じっこく）街道は、古くから武州～上州～信州を結ぶ経済・文化往来の重要な道で、上武国境付近で分岐する諸道とつながり、秩父地方との交流の道でもありました。中山道（なかせんどう）（京都～江戸間）の新町宿から藤岡、鬼石、万場を経て南佐久地方（長野県）へ通じる道で、40 以上の橋で川を渡り、山を登り、尾根を下らなければならない難所続きの場所でした。

水害や飢饉（ききん）も多く、寛文 11 年（1671）の史料によると、75 年間に 24 回、ほぼ 3 年に 1 回の割合で水害が発生しており、谷あいで洪水被害を受けやすい土地柄だったことがわかります。

神流川は関東では珍しいアルカリ河川で、神泉村をはじめ神の字を用いる所が多く、神葬祭が多いといわれています。

下久保ダム貯水池（神流湖）周辺図



村がダムになる

この地に大規模な多目的ダムが建設されるというこの報に接した地元では、昭和 33 年 11 月、下久保ダム連合対策委員会を結成しました。補償の対象となった土地は 338ha、移転対象 364 世帯に及ぶため、鬼石町、神泉村、吉田町、万場町が団結して建設に伴う個人補償と公共補償の交渉にあたりました。大規模な水没に伴う補償問題であるにもかかわらず、昭和 39 年中に円満に交渉がまとまり、全国でも稀にみる成果を挙げました。ちなみにほぼ同時期に造られた矢木沢ダムの補償は 1 軒だけでした。

『下久保ダムの記録』によれば、その理由として次のことが挙げられています。

① 下久保ダム連合対策委員会の方々が私心を捨てて、水没者に対する適正な補償と生活再建のために昼夜を分かたぬ懸命な努力をされたこと。

② 公団関係者が、水没者の立場に深い理解をもち、誠意と愛情をもって、この問題に対処したこと。

③ 群馬・埼玉両県と関係市町村が、公団と水没者の間に立ち、県境を超えて一体となり、補償の円満妥結と水没地区の再建に尽力したこと。

補償金額の個別交渉（囲炉裏端で）

すなわち、水没関係者も事業施工者も終始、良識と誠意をもって取り組み、いくつかの難関を突破し、円満妥結に至ったのでした。先頭に立って交渉にあたった阿部吉春委員長は、「小中学校で学んだ教室や祖先伝来の墳墓が永遠の湖底に消え去ることには感無量のものがあるが、東京都 1 千万人の飲料水の確保、下流の洪水防止、かんがい用水、発電等、平和国家建設の役に立てば、祖先もお許し下さると念願する」と述べています。また、松村賢吉・下久保ダム建設所長は「水没する方々の身になって考えること。それ以外に補償を解決する方法はない」と誠意をもって当たり、4 年余りにわたる交渉のプロセスのなかで、双方ともに献身的な努力を続け、昭和 38 年春に補償基準の同意を得ることができたのです。

工事風景　法久八壺橋付近の旧県道（下）と新県道（上）

さらに飯塚馨・鬼石町長は「従来の一時的な金銭補償の欠陥を根本的に改め、水没者、残存者を含めた地域住民が、ダムの恩恵を受ける下流地域の人々と同等、またはそれ以上の利益が受けられ、安心して生活できる画期的な補償を目ざして努力した」と述べており、「耕して天に至る」というような農業中心の村から、新しい時代の要請に応じた観光事業を推進し、地場産業をさらに発展させたいとの期待も込められていました。

こうして昭和 34 年 4 月 1 日に着手した工事は、昭和 43 年 11 月 13 日に竣工。総工費約 200 億円、工事所要労力は延べ 150 万人（推定）、竣工式は、水没関係者、工事関係者その他 1500 人が出席して、盛大に行われました。

先祖伝来の田畑山林を手離してこの地を離れた人々は、移転場所として藤岡市、新町、本庄市、鬼石町等を希望し、それぞれ適職を選び、新しい職業に合わせて移転して行きました。これら故郷を離れることを余儀なくされた犠牲者の方々のことは、永遠に忘れてはならないでしょう。

水没犠牲者　合計 364 世帯
　群馬県　鬼石町、万場町の一部　296 世帯
　埼玉県　神泉村、吉田町の一部　68 世帯
　田畑等耕作地　108ha
　山林　230ha
その他、県道、町村道、小中学校 2 校、農協・郵便局 2 か所、多数の墓地が水没した。

藤岡市坂原の菅原神社境内には、坂井三嶺子の句碑があります。（昭和 42 年建立）

ダムとなる　故郷（ふるさと）かなし　麦の秋

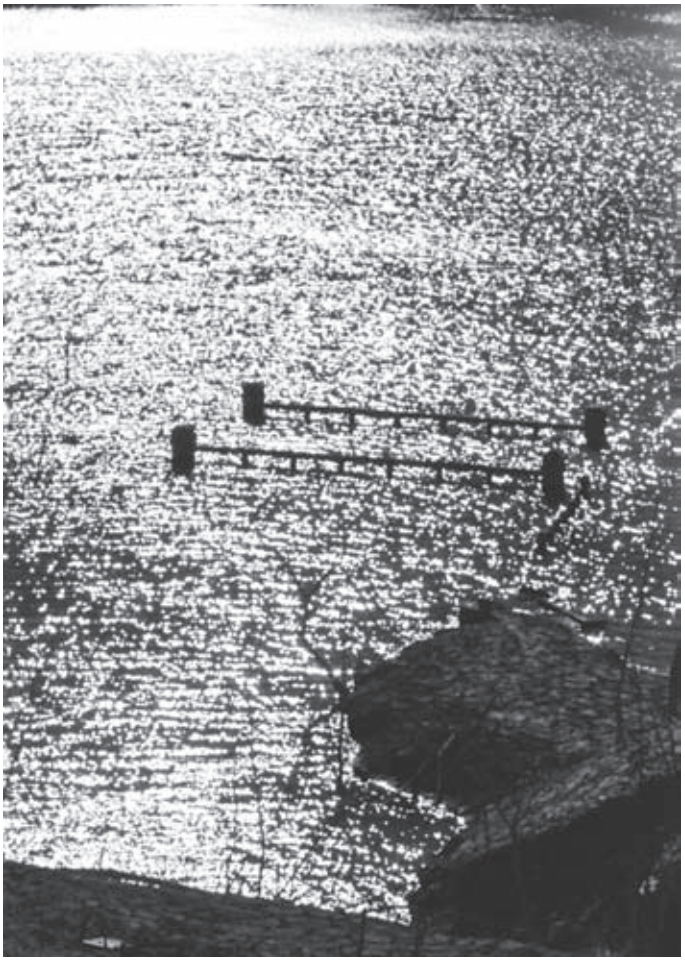
水没の村、浮上

下久保ダムが完成して 7 年後の昭和 51 年夏、下久保ダムに表面取水設備を設置する工事に備えて水位を下げたため、すっかり空になったダムの湖底が姿を現わしました。これはダムの構造が水深 73 mのダムの底から取水する仕組みになっていたため、下流の神流川に出てくる水は夏でも水温 12 ～ 3℃と冷たく、下流の農家から「農作物の生育が悪くなった」など苦情が相次ぎ、表面（20℃の水温）からの取水に切り替える工事が実施されたことによるものでした。

大きなダムでのこのような工事が行われることは大変珍しく、ダム関係の専門家や水没関係者など多くの人々が「ダムの湖底を見られるまたとないチャンス」と、大勢、駆けつけるようになりました。

元上毛写真連盟理事長の飯塚誠さん（伊勢崎市在住）

浮上した村の光景



写真提供　藤岡市（写真は飯塚誠氏が撮影、同市に寄贈）

上流の金毘羅渓谷

神流湖　手前の白い建物が下久保ダム管理所　対岸の山々の電波塔と結び、水量等のデータを収集している。

は、故郷がダム湖に沈んだ知人からこの情報を聞き、先祖代々、人々の住み慣れた湖底の村の様子を撮りたいと、昭和51年9月から翌年4月にかけて、毎週日曜日に干上がった湖底に下り、長靴をはいて撮影を続けたのでした。

飯塚さんは「初めはヘドロが軟らかくて歩ける状態ではなく、地面が乾くのを待って9月中旬から撮影を始めたのです。灰色のヒビ割れした湖底に、わずかに家屋の跡や石垣を積み上げた棚田のような畑、橋やひび割れた地面などを撮影しました。無人の館を撮影した時は、その暮らしの痕跡に胸がいたみました。その後、工事が進み、徐々に水位が上がり撮影できなくなりました」と話しています。

写真歴が長く、数々の賞を受賞している飯塚さんは、さまざまなアングルから独創的な写真を撮り、この間に撮影したネガフィルムは1000点に上るそうです。

それらを親交のあった写真家で日本写真家協会名誉会長の故秋山庄太郎さんに見せたところ、「貴重な記録となるはず。2～30年待ってから発表したほうがいい」とのアドバイスを受け、長い間、保存していました。

そして35年後の平成24年11月、貴重なダムの湖底写真を初公開する写真展を高崎市シティギャラリー、鬼石総合支所などで開催し、大きな反響を呼びました。写真展を見に来た水没関係者の中には、相談して集まって見に来た人達もいて、変わりはてた故郷に、胸をしめつけられるような表情で見入っていました。飯塚さんに感想の手紙を寄せてきた人もいたとのことです。

飯塚さんは、「写真の原点はなんといっても記録。2度と見ることができない光景を後世に残し、地元で展示して欲しい」と、すでにネガフィルムを藤岡市に寄贈しており、藤岡市では、今後もこの貴重な写真の活用方法を検討していくとしています。

また、下久保ダム建設によって藤岡市地区に転出した人達は、「水没世帯の交流を図る懇親会」を結成し、2年に1度のペースで同窓会を開催し、湖底に沈んだふるさとの思い出を語り合える場を持ってきました。しかし、移転後の人生のほうが長くなると、そうしたきずなも次第に薄れていくことでしょう。

いま神流湖の豊かな水をたたえる渓谷は、緑豊かな山並みを映し、平将門伝説や冬桜で知られる城峯公園や奇岩巨石が連なる天然記念物・三波石峡と一体となった景勝地として、四季折々に自然の豊かさとスケールの大きさを感じるエリアとなり、多くの観光客が訪れています。

ほぼ同時期に計画提示された八ッ場ダムが、未だに難航している状況を考える時、40年以上にわたり首都圏で安定した水の恩恵を受けている私達は、ダムの底に沈んだ村の苦難の歴史を永く語り伝えていかなければと思います。

参考文献

『下久保ダムの記録』　下久保ダム連合対策委員会　昭和45年10月

『神泉村誌―歴史編』　編集・神泉村教育委員会・神泉村誌編さん委員会　発行・神泉村　平成17年11月

『鬼石町誌』編集・鬼石町誌編さん委員会　発行・鬼石町教育委員会　昭和59年10月

「上毛新聞」平成13年8月5日、同24年11月1日発行　他